



TITLE:

聖成吉思汗の家譜(3)

AUTHOR(S):

山本, 守

---

CITATION:

山本, 守. 聖成吉思汗の家譜(3). 東洋史研究 1936, 1(4): 355-365

ISSUE DATE:

1936-04-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138693>

RIGHT:

# 聖成吉思汗の家譜 (3)

山 本 守 譯

岱齊果特の *Čingir būhe* (布克齊勒格爾) は「成吉思汗に」害を加へようと思つて家に穴を掘つてその上に敷物を置いて「一族に生れた我々は他人ぢやなくて一つだ。如何して惡く(仲違して)行くだらうか」と云つて主(成吉思汗)を自分の家に招待せんとするに、烏格楞哈屯は詔するに「毒ある敵を少なしと、毒持つ蛇を細いと云ふ勿れ、信無きを注意せよ」と言つた時に、聖主詔して「哈薩爾汝鞭を見守れ、伯勒格德依汝事を治めよ」と云つた。「*Sačugu* (哈濟津) 汝馬を管せよ」と云つた。「烏(一作鵠)濟錦汝我側に坐せよ。如何なる事が起るかも判らない」と詔して行つた。主岱齊果特の家に入つて、敷物の真中に坐らんとするに、烏濟錦は主の身體を引いて、褥の端の方に坐らせた。この時一婦人跛ひいて來て *jūb tahi* (?) 鐙を切つて取つて行くのを伯勒格德依見

るや否や、この女の左足を折つて棄てた。*Büri bolnola* (漢譯蒙古源流では「彼衆」と記せども蒙文源流は *Büri būhe* — 即ち秘史の不哩孛濶 — と記す) は伯勒格德依の肩を斬つた。即ちお互に惡くなるに、哈薩爾は箭を整へて居た。伯勒格德依は *amagatu airak* (意味不明、秘史の亦禿格孫不列兀<sup>惕</sup> 即ち「皮桶的撞乳椎」に當るものか) で打つて、科爾沁の *Tukrahui* (托克唐阿台吉) の *ernek Čagacūin* (蒙古源流作鏽紫白騾馬) に到つて、君を左手で擡舉して乗らしめた。かゝる理由により *Tukrahui* を優遇して *Dathan* 姓のものとなした。見て居りながら鐙を切られたと云ふ理由で *Hačugu* (前出 *sačugu* と同一人ならん) を叱つたと云ふ。さて伯勒格德依を捉へて大車に入れて置いて夜寢た後、伯勒格德依は大車を曳きながら歸つて行つた。聖主は「岱齊果特の争に、伯勒格德

依が我を助けないで、左手で取つて馬に乘らしめた」と云つて責めた。これより哈薩爾伯勒格德依二人は「これ君の道理のたゝぬ詔勅である。哈薩爾の射、伯勒格德依の大力により、五色四大外國を勢力内に入れよう」と、話し合つて行くのを君知りて、「彼等の驕慢を押へん」とて卑しい爺となつて、一長弓を持つて「賣らう」と云つて探りながら行つた。行く途に哈薩爾、伯勒格德依二人が出遭つて、「一向にこんな人を見た事が無い。これは何處から來た人か」と尋ねた時、この爺云はく「我は貧窮せるものである。弓を賣らんとて行くのである。」と云つたので、哈薩爾、伯勒格德依二人で、「この弓を我々に取れと云ふのか」と餘りに輕侮するので、この爺は云ふのに、「惡しと雖も弓に弦をかけて也と曲げるであらう（弦もかけられまいの意）」と云ふに、伯勒格德依は取つて弓に弦をかける事が出来なかつた。この爺取つて弦を張つて哈薩爾に與へた。哈薩爾受取つて弓を引きしぼる事が出来なかつた。そこでこの爺青白の驛馬に乗つた鬚髮班白の人となつて、長い黄い弓に金の木圍頂（天幕の天井木）を番へて峰をはつしと射て云ふのに、「聖主の哈薩爾伯勒格德依と云ふ弟は汝等二人なるか。」「何ぞ」大

言壯語する」と叱つて行つた。この二人の弟懼れて主の化身はこれであらうか」と云つて、謹んで話し合つた。それより彼等かゝる言を話すのを吟味した。（愼んだ）

曩古特の烏蘭昌貴と云ふもの三十一遊牧地の民を率いて落日の後（夜に入つての意）敵になると云つて去つた。

主と哈薩爾二人で追つて追つた。その時主の賽音薩穆津と云ふ馬に哈薩爾が乗つて、子供を「托克唐阿巴圖兒台吉を導け」と圍ましめて、賽音薩穆津を血に染まるまで戦い、抑壓して率いて行つた。哈薩爾は「Bohala」と名附くる女を賞として取つた。其後烏蘭昌貴は「Hobilgan sečen hagan」に硝子塔を致した時「al alhan」と名附くる娘を與へた。

布里雅特の「Oro žiguzh」大 Baikal から naran (način 鴉鵲の誤ならん) を捕へて主の下に來た時 oro žiguzh によつて、布里雅特を支配せしめた。其後、主鷹を烏勒呼河から「ulai in good (烏拉河) に到るまで放つて行くに jürčir (殊爾齊特) の Wangjun hagan (旺楚克汗) 見て誹謗して來なかつた。主歸つて責めて兵を起して行つた。烏拉河に渡口が無い、そこで哈薩爾の孫 nanto šira han-čalo Čing dajir (源流作托克唐阿巴圖爾台吉之子安敦青

台吉)萬頭の騮馬の鐙を連ねて、吶喊して出で、城をば騙して、一萬羽の燕、一千匹の猫を税として徴した。燕に夏布を紅く焼いて(布に火を付けて)結びつけた。猫に棉を結びつけ火を點じて放つた。燕は自分の巢に入つた。猫は家屋の上に出た。猫と燕の二つの火で焼いて城を取つた。Wanjun 汗は「jik (?)であらうか猫であらうか」と云つた。聖主は Wanjun 汗の女 jalohai haton (雅里海)を娶つた。この哈屯途中に死んだと云ふのだから。聖主日の入る方向にある高麗國に行獵して行く中に、烏訥根江溢れて主の身並大兵此方に滞在した。自分に代つて使者を遣はして、「聖主税を取る爲に來たのだ」と云つた時、高麗の Boga Čagan hagan (察罕汗)自分の和蘭(源流作高麗墨爾格特岱爾烏遜之女和蘭郭幹)と名附くる女を盗み出し獻上して、虎、家と共に高麗二村の下婢を添へて舟で連れて來た時、聖主は高麗の boga Čagan 始め官吏等全部を江の此方に呼んで勅あり、「汝等我に貢與するならば彼方此方に見張せよ」と勅せるに全部勅の通りになつた。その後聖主は和蘭哈屯と直に一緒にならんとするに、「野で一緒になるならば本々道理なき事である。家に到つて憐んだら如何か」と皆の大臣申

し上ぐれば、宜しからずとて直に一緒になつた。それよりこの高麗國に三年宿つて住むに、この間 Argasun horč (阿爾噶遜)に國を治めよと住はしめた。是に於て家より「聖主如何なる理由で滞在したか」と Argasun horč を使として遣はすに、彼は Horbalon jigerte (馬の名?)に乗つて三月かゝつて行く地に、三泊で到着して「主は御機嫌如何か」と尋ねた。主は「機嫌は善し」と云つた。次で「臣下や皇后子供等凡て全國皆機嫌善いか」と尋ねた。Horč 答へるのに、「汝の皇后や子供は機嫌よくある。全國の風氣を知らなかつた。汝の妻子は機嫌善くある。並に大國の風氣を知らなかつた。壞れた口に魚皮を得て食べた。汝の國中の風氣を知らなかつた。渴した口に水血を得て飲んだ。汝の國蒙古の風氣を知らなかつた」と答へた時、主は悟らなかつた。再び云へよと云つた時 Argasun horč 答へるのに「婆羅樹に Sarbar 鳥(源流作海青)が卵を産んだと云ふ。その婆羅樹に靠つて住んで居る中に、惡鳥花豹(鷹の一種)巢を毀して卵、雛を食つたと云ふ。竹ある池に天鵝が卵を産んだと云ふ。その竹に靠つて居りながら、惡い鷹(源流作白爪)に巢を毀されて卵や雛を食はれたと云ふ福ある我主よ考

へよ」と答へた。主は Hord の言を「わかつたか汝等」と云つた時、役人等は「わからなかつた」と言つたので主自ら知つて勅して云ふに、「婆羅樹と云ふのは我凡ての友達であらうか、sabar 鳥と云ふのは我身であらうか。花豹と云ふのは高麗の國であらうか。卵雛と云ふのは我哈屯や子供の事であらうか。巢と云ふのは平和な大國家であらうか。竹ある池と云ふのは全大國であらうか。天鵝と云ふのは我身であらうか。鷹と云ふのは高麗の國であらうか。卵雛と云ふのは我哈屯や子供の意であらうか。巢と云ふのは平和な國家であらうか」と勅して帽纓を正した。聖主勅するに「我 Bureheljin (布爾德) は小さい時に遇つたのであつた。彼の顔に答ふるに難し。家に入れば家は狭くなるであらう——面目なくて家に歸られぬの意——家の人と商議せず外人の目前に嗔怒して思はゞ羞ぢ懼れる如くあらう。——(人前で怒られるのは面目ない)——我九烏爾魯克中一人を遣はして言葉と共に擱んで來れ——(妥共して置け)——大變緊要なる事と思ふ」と言つた時、札賚爾の Gooa moholi (摩和賚)、主の詔によつて行つて Bureheljin 哈屯に叩頭して座せり。そこで哈屯勅して云ふのに「我主機謙善きか。汝如何なる理

由で來たか」と尋ねた時、奏するに「主の詔を知らしめようとて來たのである。建てたる國によつて成らず堅固なる希望によつて成つた。諫臣の言に従はなかつた。虎家(源流虎皮穹廬)の色になつて(意不明)聖主は和蘭哈屯とそこに一緒になつた」と言つた時、Bureheljin haon は勅するに、「汗の力であらうか。普き蒙古の希望であらうか。聖主の力であらうか。大衆の希望であらうか。江岸に鵝雁多しと云ふ。拇指を Cirala (?) 狙ふのを我主知つて居るであらう。普く國に娘や女等が多いと云ふ。探して取る事を我主知るであらう。竹ある池に鵝雁多しと云ふ。指を Cirala (?) 狙ふのを我主知るだらう。普き大國に娘女多し。福ある主尋して取る事を自ら知るでせう。善獵者岸の鴨を二つを一度に射ると云ふ。男は好きならば姉妹二人を一緒に娶ると云ふ。ending (?) 馬の上に鞍を用意せよと云ふのか。女の上に女を取れと云ふのか。餘あるのが悪いだらうか。不足せるのが善いだらうか。衣服を重ねて寒からしむなと云へ繩子の三本を斷つなと云へ」と勅した。

聖主は和蘭哈屯を取つて來るに、阿爾噶遜浩爾齊奶子酒に酔つて、金胡琴を持つて他に宿つたと知らしめた所

聖主は博郭爾濟・摩和賞二人を呼んで云ふに、「阿爾噶遜浩爾齊を聲なく招け、叱る事なく棄てよ」と遣はした。博郭爾濟摩和賞は云つて言ふのに、「阿爾噶遜爾齊汝を酒に酔つて、金胡琴を持つて他に宿つたとて、聲なく招け叱る事なく棄てよと遣はした」と云つた時、阿爾噶遜浩爾齊曰はく「殺す人の聲を取ると云へ、死する人の言を話すと云へ」と言つた時、この二人の役人殺すのを止めて、偉人の振舞酒を脇の窪みに、權力者の馳走酒を胸に持たしめて來さしめるに、聖主は就寢して居られる。博郭爾濟摩和賞二人で、窗の外から奏上するに「汝の明るい大帳に光が入つて居る。家の子女を醒させよう。咎ある人道に集つてあり、大詔を修めて出せ。汝の玉殿に光入つて居る。家の門戸を開かせよ。汝の苦憂ある人集つてあり、大令を與へて出せ」と奏上するに、主は言葉を賜はつて、阿爾噶遜浩爾齊の前に取つて入らしめて、主は令を出さず、博郭爾濟摩和賞二人の臣、又聲を出さない。阿爾噶遜浩爾齊自ら奏するに、「野には喜鵲が轉り、轉る時兀鷹が襲撃して馳けて來る時、ジャンと云ふ聲を出す事が出来なかつたと云ふ。天命ある君を怨み憎んで座するに、ジャンと云ふ聲を答へる事が出来なかつた

我。十歳の時より汝の金胡琴を收めたるぞ、汝の陰陽を學びたるぞ。悪い性質を得なかつたぞ、酒に過またれたる我誠よ。酒に過またれて汝の金胡琴を取つて遠きを思はなかつた。二十歳から福ある汝の胡琴を管理したのである。洒落や聰明を學んだ。浪費悪習慣を得なかつた。情慾に過られて福ある汝の胡琴を取りて、遠きを思はなかつた」と答へた時、主聞いて「口を善く出た我阿爾噶遜哉。洒落を善く出したる阿爾噶遜浩爾齊哉」とて殺すのを止めて、總てを勅を與へて解散した。

聖主は漢地を權力内に入れしめて金可汗の位を取つたのを、唐古特の錫都爾固汗聞いて懼れて、巴廷薩爾塔固爾之子多爾通を派遣して「汝の右手となりて、汝に租税を與へよう」と使を遣はした。此の使者聖主に奏上して歸る時、「聖主は天の子と云ふは誠である。然し哈屯は我々の哈屯の方が美しい。(我々の哈屯は)その光で夜燈を要しない」と云つて歸つた。聖主は岱齊果特の雅布噶の妻蒙郭倫郭幹を哈屯につれて行つて居た。多爾通のかゝる言を雅布噶聞いて、主に返答するに「我妻蒙郭倫郭幹よりも漢地の Jangjakni sečin onitai (ᠵᠠᠩᠵᠠᠵᠠᠨᠰᠡᠴᠢᠨᠣᠨᠢᠲᠠᠢ) の娘唐古特の錫都爾固汗の Hühbejin Goca (錫魯袞古爾伯勒津

郭幹哈屯」と名附くる哈屯の光に夜燈明を要しないと云ふ。彼女を娶らないか」と奏上した時、主答ふるに「我薩爾塔郭勒の國に出征しよう。汝出馬せよ」と錫都爾固汗に使者を遣はした。この使者に錫都爾固汗曰はく「凡てを支配しない中に、可汗となつたと云ふはこれ如何なる可汗ぞ。友何ぞ必要あらん」とて従はなかつた。主この言を聞いて我命の終るまで汝を放た(許可の意か)ないと誓つた。

薩爾塔郭勒の soldong hagan (札里雅特蘇勒德汗) を殺して、その國を支配下に入れて取つた。その時軍隊に和蘭哈屯を伴つて出征したと云ふ。その後天帝天より聖主に曩の幸の力によつて、寶玉の椀に甘酒を賜はつた。恐れる如く聖主取りて召上りて坐すに、四人の弟奏するに「兄に十ならば弟には四を施すのではないか。今主澤山に召上つて、憐んで我々に少しを與へ給へ。奏して明に知れ」と奏した時、聖主は弟等に勅して「昔生れた時に、我右手に龍王の處から、寶玉印を佛の詔によつて賜はつた。今權力ある上帝、天より寶玉の椀に甘酒を施し賜はつた。これにより尊い命ある君は我であるかと思ふ。今汝等飲まんと欲するならば飲め、どうぞ」と云つ

て與へ賜ふた。四弟は取つて飲めば、口に入りて喉に入らず。そこで四弟は主に答へるに「天命ある主から天命なき我々は誤つて争つた。役所の仕事を知る(司る)役人とならう我々は、主よ召上れ」と叩頭して呈上した。主取つて食べてこの甘酒に酔つて勅するに「曩に生れる時に佛の命により、龍王の寶玉の印を賜はつた。今上帝天より寶玉の椀に甘酒を賜はつた。これに依つて見れば、『天命ある主は我なるか』と知つて唐古特の民に出征せん」と勅した。

錫都爾固可汗の里鼻の “Sira honggor hübeleg” と名附くる犬すでに早く來て居る。聖主九脚の白纛を正して建て、三年出發して宿つた。この犬が無事平安泰平安樂安逸と吠へる間は敵が無い。遠吠するに敵となるものがあつたと云ふ。この犬、主の出征を知つて、三年間遠吠した。「然るに錫都爾固汗は」「我犬は年寄つて祥瑞無くなつた」と云つて疑はずに過した。その後歩兵を戊年行かして、亥年聖主は “jisur haton” を連れて出發して、兵等を導かんと自ら出馬した。聖主は穆納地方を見て勅あるに「壞れたる國を退避しよう。太平なる國に遊牧せう。今 “irenu bota” に遊牧せん」と勅した。木の

上に止まつた惡聲の鼻を見て、主哈薩爾に「射よ」と勅するに、哈薩爾射た。鼻立つてその代りに喜鵲おりて來てその翼が斷ち射られた。君は「止めよ」と云つて、責めて刀を振り上げて居る時、烏爾魯克諾延奏して云ふのに『善の汚穢惡の sarbok (?)』と云ふ事がある。主自ら知るや」と云ふに主賛成して詔した。その後 Bogol mačin (Bogol は奴隸の意) が「汝の弟 hudeci (馬) の意」——哈薩爾が飲酒して居る時、和蘭哈屯の手を取つた」と奏上した所、「主は」哈薩爾から「Hačir dasun etu」(源流作大毘鵬翎) を持つて來う」と Bogol mačin を遣はした。哈薩爾云ふのに「普き君主と雖も “Hačir dasun etu” を持つて行くのに我善からうか」と言つて “Hačir dasun etu” を與へた。[mačin] は「庫にしまふとけ」と云つて取らずに歸つた。それより「黒い hajlan (源流作骨頂) を殺して持つて來う」と Bogol mačin を再び遣はした。黒い hajlan 飛んで行くのを見て「哈薩爾」は何處を射すのか」と Bogol mačin に尋ねるに mačin 曰く「黒と黄の二つの間を射よ」と云ふに鼻を射て倒した。「汗に禮物として “hačir dasun etu” を與へよう」と「哈薩爾」が云つた所 [mačin] は「これは黒い hajlan」で

は無い。血が浸んだ」と云つて取つて歸らなかつた。こゝに於いて主責めて曰はく「曩には多倫鴻郭達と言を一つにして行つた。後には悪い聲ある鼻を殺せと云つたら黒い善い聲の喜鵲を殺した。今又 “Hačir dasun etu” を與へなかつた。」「と云つて」四人の人に看守せしめて、咒を食料に與へて、木柵ある井戸に縛つて放置した。Hanggai hagan 杭愛山——大敗獵を行ふ爲に傳令した。「その中に狼 (bürte cinoia) と鹿 (gooa marai) が入つて居る。それを殺す勿れ “hühe boro” (灰青馬) ——を持つた捲毛の黒人が入つて居る。彼を生捕れ」と詔した。狼と鹿の二つが入つて來たのを殺さず驅つて出した “hühe boro” を持つた者が入つて來たのを捕へて「誰の “hü” — hü は hiya (侍衛) の誤か——と尋ねるに聲を出さなかつた。故に主の所に連れて行つて與へた。主が尋ねた所、彼答へるのに「蒙古の主が兵を出したとて、錫都爾固汗が見帳人として出したのである。腿ある馬に釘 (蹄鐵) ——を打たない “hühe boro” と云ふものだ。追ひつかれた。四蹄は無駄となつた。黒頭ある人に釘を打たない。善く馳する hara borong (黒い公野家) と云ふものであるぞ我は。今黒頭ある人に釘を打ちたり我。我



黒頭無駄となつた」と言つた時に、聖主尋ねるに「汝の汗の化身を語れ。眞を云へ。」と言つた時、Boongが云ふのに「朝に毒ある *sicagan* (?) 黄い模様ある蛇となるにより、捉へる事は出来ない。正午には *hilen* (?) 模様の虎となるにより、捉へる事が出来ない。晩には宿處に美しい黄い子供となつて、哈屯と共に戯れて坐して居る故に捉へる事が出来る。」と云つたので、この人を殺すのをやめしめた。さて唐古特の民の境界に到着するまで錫都爾固汗の “*rakcin jagur tu hariyalci hara emegen*” (源流作善法術之哈喇剛噶老嫗蒙古の兵を迎へ來て、驕馬を術を以て殺した。主に蘇伯格特依巴圖爾奏して「この嫗惡し。驕馬を術を以て殺した。哈薩爾を大扎撒を以て出せよ」と申し上げる時、主然りとなして、自分の *jitur tu hola mori* (翼ある黒黄馬) に乗らせて來て老嫗を射させた。哈薩爾身體を捉へんとして艱難したる爲に、腿面(膝)の腰鈴を射た。この老嫗側面から落ちて死する時、「哈薩爾よ、汝の後嗣傷つて死んでしまへ。汝の娘はその夫に棄てられしまへ」と罵つて死んだ。さて錫都爾固汗の蛇になつた時に、主は鳳凰になつた。虎になつた時に、主は獅子になつた。子供になつた

時に、主は老翁となつて捉へた。錫都爾固汗は捉へられた後、主に向つて云ふのに「我を殺す勿れ。亮星を捉へて敵を無くなし、彗星を捉へて饑饉を無くなせば(よし)我を殺すならば、汝の生命に害あり。殺さざれば汝の子孫に惡し。」と奏上した時、その言を不可となして、射て砍つて殺せなかつた。錫都爾固汗云ふのに「我身を砍つて射て殺せなかつた。我靴の底に三つに折つた “*caiyen hoši olang*” (?) (蒙古源流 *miari* と名付くる剛刀と記す) がある。それで砍つて殺せ」と云ふので、かの “*hoši olang*” を持つて來て砍らんとするに、錫都爾固汗申すに「私を今絞首して殺してもよい。汝の後嗣は我と同様絞首せられて死んでしまへ。我古爾伯勒津郭幹哈屯を黒い爪から普く搜檢せよ」と云つて死した。聖主は古爾伯勒津郭幹哈屯を娶つた。彼女の容色を主始め全國の人齊しく驚嘆した。古爾伯勒津郭幹哈屯云ふのに「我この容色は汝の兵の塵埃の爲に古びた。前にはこれよりも餘程美しくあつた。今水に浴すれば大變に美しくなる」と云ふ。この言葉に聖主は信じて「水に浴しよう」と遣はした。この哈屯水邊に行つて、青い雀の尾に文を書いて「私はこの水に死す。我身を下流に探す勿れ、溯つて

探せ。」とその父に遣はして、水に跳込んで死んだ。父は娘の言によつて、探して河の上流に來つて、探し得て頭の一つ／＼を皮袋によつて尋ねて葬つた。Cokka (?) は「鐵蘆岡」と云ひ、江をば「哈屯河」と云ふ。唐古特國を降し、錫都爾固汗を殺して、圖爾默格依城を降して古爾伯勒津幹哈屯を娶つて、かの圍獵に Loobang 山に避暑し、圖爾默格依城に聖主重く熱を發して命を出す時に——(臨終に及んでの意?)——勅するに「Hürder (庫德爾) の如き四弟、hülik (庫魯克駿馬の意) の如き四子、五色四外國聞けよ、革の鐙が伸びるまで、鐵の鐙が燒けるまで、蓄へて大國をば艱難して經營して行く時には、かくの如き憂苦を見なかつた。erneq tagakün — 馬名——に乗つて“esgei in dago” (?) を折つて大國を經略して專念する時斯く憂苦を見なかつた。曩昔一族の負債となつたか」と勅あつた。聖主かく勅あつて「Edün bigütin (?)」我大臣よ、我と共に死せよ。汝等。」と勅した。蘇尼特の Giliğedei (古魯根巴圖爾) 奏するに、「玉となつた汝の國は低下するであらう。惜可汝の Bürehejin haton は死するであらう。哈薩爾伯勒格德依二人の弟は離反するだらう。集めて經營した汝の多くの國は何處に、如何

に散ずるだらう。高くなつた汝の國は亂れるであらう。しつかりと相遇した Bürehejin 哈屯は死するであらう。烏格德依托壘の二人は孤兒となるであらう。時に應じて運びたる澤山の民は他人となつて散ずるであらう。山となつた汝の國は亂れるであらう。得て招きたる Bürehejin haton は死するであらう。Oöho, Haöho (譯濟錦哈濟錦?) 二人は離れるであらう。澤山に運びたる數多の民山、森林毎に亂れるであらう。杭愛山を <sup>(二)</sup>haci-sulaöa (?) 遊牧しよう。汝の妻子は泣いて來るであらう。彼等によつての善き教訓を言つて下さい。古びた高き <sup>(三)</sup>igelen (?) 遊牧しよう。汝の娘子等泣いて來るであらう。彼等によつての善き教訓を言つて下さい。嬰兒の身體を傷ける事は難いであらう。若し傷けるならば涅槃の地に面會する我、誠となつたか。iegüi (外人?) の身體を毀つに難いであらう。若し毀つならば enghecin (?) の地に遭遇する我、誠となつたか。獨り遺された汝の Bürehejin 哈屯に、孤兒として遺された烏格德依托壘二人に、郊野の水を指示して與へて下さい。坂路に道を指示して與へて下さい」と奏上すれば成吉思汗詔ありて「行きて死する勿れ。獨り遺されたる我 Bürehejin 哈屯

孤兒として遺されたる烏格德依、托壘二人に、郊野の水山路に道を指示して與へよ」と勅あつた。又「玉石に皮なし。剛鐵に皮なし。可惜生れたる富者に銀なし。歸還なく行きて硬く心せよ汝等。百の根源ある工作を成就せしめるならば、仕事の始め眞の言葉に至つた人の心固し。小さい願望によつて行きて多くと共に努力せよ。汝等。誠によつて遊牧して死んで行く身であるぞ。後々善き國家を守れよ。幼子呼必賽の言葉は別であらうか。彼の言によつて行へよ汝等」と詔を下して後丙亥年六十七歳（六十六歳）で七月十二日崩じた。大車に駿馬―蒙語 *hürik*―を着けて汗の屍體を載せて歸つて來る時、蘇尼持の吉魯根巴圖爾が主を稱賛して、「飄去する鷹の翅となつて去るか、汝我主よ。音を立てる車―靈樞車―の荷物となつたか、汝我主よ。襲撃する鷹の翅となつて行くか、汝我主よ。圍繞する車の荷となつたか汝我主よ。轉る鳥の翅となつて去つたか、汝我主よ。歌ふ車の荷物となつたか汝我主よ」と賞賛して來るに穆納の *hügbür* に到つて大車の轂泥にはまつて動かす事が出来ない。五色の駿馬を着けて、圍んで困窮する群集が、憂苦する時、蘇尼持の吉魯根巴圖爾叩頭して奏するに、「青い銀の天の高

きより、命あつて生れたる駿馬（の如き）聖主よ、群集大國を抛つて到りたり汝。自己の一族に平和あらしめた汝の政治、*tiögen*（？）あらしめた汝の國、生まれしめた汝の妻や子、生れたる汗、地、水かしこにあり。清くあらしめたる汝の政治 *albalan*（奉仕？）あらしめたる汝の國親しい汝の妻や子、汝の金の帳殿彼處にあり。巧にあらしめたる汝の政治、相見たる汝の妻や子等、先に經略した澤山の國、汝の親戚かしこにあり。降國の民、沐浴したる水や雪、多くの蒙古國 *Onon*（鄂諾江）汎濫して出生したる地、水彼處にあり、汝の種馬、頂毛を編んで作つた纛、幟。鼓、喇叭、汝の凡ての國、*kalien*（克魯倫）の郊野 *arolan* の汗の住したる地、水彼處にあり *büdehin*（？）の先に相見たる *Bürtehjin* 哈屯、布爾噶圖汗の地水遊牧地、博郭爾濟莫和賚二人の友、全き汝の政禮彼處にあり、神に依つて相見たる和蘭哈屯、汝の胡笳胡琴樂器普き大國有福の汗の地水彼處に在り。哈爾固納汗山を暖しとて、哈屯古爾伯勒津を美しとて反つて唐古特を衆多しとて、可惜舊蒙古國を捨てたか汝。我主よ。惜むべき御命出づるならば玉寶の如く汝の柩を取りて歸らう。  
*Bürtehjin* 哈屯に見せしめよう。汝の全國に贈らう」

と申し上げた。汗憐んで賜ふた。大車は徐々に牽いた。全民は喜んだ。汗大地に彼處に送つた。凡ての銀、御屍彼處に出で、汗の大臣等の支柱となつて、全國の神體となつて總ての銀の芝八白室を作つたか。聖主こゝより去る時、好んで詔ありたるの故に今 tohat(トハツ)の大車となる

る能力終つた。大國に假の榜を與へて着て居た襦衣天幕樂器靴下をそこに葬つたと云ふ。眞の屍體は或者 Enhan 〃 halona (不爾干哈爾固納)に葬つたと云ふ。或は阿勒台山の山蔭に hendai(哈岱山)の陽にある大謬特克と名付くる地に葬つたと云ふ。(第三回終り)

### Angus Hamilton : Corea.

千九百四年ニューヨーク刊行

章を分つこと二十四、附録八篇あり

宣教師にして歐洲人の手になりし朝鮮史中最も早きものゝ一なるべし。

にして遼東に關する記事多大にして朝鮮に關するもの比較的少なし、吾人は今日既に此書より得るものなし

予が面白く感じたる事は第一章の

著者は朝鮮に入りしことなく其滿洲にありて得し支那人よりの材料史藉を合

と雖も遼東にありて僅少なる材料を以て多大なる辛苦を以て著述された

Island flora へ Forgotten Voyagers

となれどこは予が偏したる研究方面

より見たるものなり、其筆に日本に

其接せし四五の朝鮮人より得しものによりて記述せしが如し。先づ

多少の同情あり、能く當時の朝鮮の

二葉の歴史地圖を掲げ三四の人物圖あり、章を分つこと十二。1 朝鮮2

ましむるものあり、而して其著述されたる年代にありては最高の智識と

政治産業風習を記せり、多年の後に

あり、章を分つこと十二。1 朝鮮2

最優秀の批判とを示したるものとして尊敬すべし。

は再び好き参考書ともなるべし。

鮮卑3 燕王慕容 4 燕帝5 高句麗6 新

羅7 契丹8 女眞9 高麗李朝を含む 10 半島

John Ross : Corea, its History, Manners, & Customs.

の風俗11 宗教12 政府13 朝鮮語14 地理

明治四十五年一月 誌す (チンシー・ルン雜記帳)